

台北高等學校生的「台北」意象： 以《繪本 台北の歌》為例^{*}

津田勤子

致理科技大學應用日語系專案助理教授

isoconet@mail.chihlee.edu.tw

摘 要

本文是台灣總督府台北高等學校（在日治時期存在 24 年的高等教育機關）學生文藝相關研究之一環，討論日本校友如何建立對於台北的意象。主要以《繪本 台北の歌（繪本 台北之歌）》作為分析素材，而這是該校的校友田中一郎在戰後遣返回到日本之後編輯發行的共 27 頁的小冊子。他在台北居住的這 12 年（1934-1946）當中，曾就讀台北市立樺山尋常小學校以及台北州立台北第二中學校，在中學校畢業之後進入台北高等學校，並於 1943 年畢業。《繪本 台北の歌》收錄由詩作、散文、版畫所構成的 21 篇小作品。本文的研究將各篇所展現的台北意象歸納為：（1）牧歌的、（2）都會性、（3）生命力、（4）台灣性四大類，並說明各自的特色。接著從作者的學校生活，以及他與當時的文化人之間的交流兩個面向去探討這種台北意象是如何形成的。最後則分析作品中充滿鄉愁的因素，從田中戰後在日本的生活環境以及各種遭遇，包括遣返日本的經驗、與同窗生的交流，討論曾經居住在台北的日本人究竟如何記憶台北的生活空間，而這些記憶對他們而言具有何種意義？故本論文嘗試以台北高校日本籍校友的生命經驗為例，進行深入的思考。

關鍵字：記憶、台北意象、田中一郎、台北高等學校、鄉愁

◎ 收稿日期：2020 年 12 月 5 日；審查通過日期：2021 年 1 月 19 日。

* 本研究係科技部補助專題研究計畫 MOST 108-2410-H-263-002-之研究成果。

台北高等学校生の「台北」イメージ： 『絵本 台北の歌』を例に*

津田勤子

致理科技大学応用日本語学科専攻助理教授

要 約

本研究は、日本統治下台湾に 24 年間存続していた台北高等学校の学生文芸に関する研究の一環で、日本人卒業生がかつて自分達が住んだ「台北」という空間をどのようにイメージしたのかを考察するものである。考察に主に使用するのは、12 年（1934-1946 年）にわたり台北に居住し、台北市立樺山尋常小学校、台北州立台北第二中学校（以下「台北二中」と略称）を経て、台北高等学校を 1943 年に卒業した田中一郎が日本帰国後に自費出版した、27 ページの小冊子『絵本 台北の歌』である。本研究ではまず、この冊子に収められている 21 編の小作品（詩・文・版画で構成）から著者が構築した 1930-40 年代の台北イメージを 4 方向——①牧歌的、②都会性、③生命力、④台湾性に分類。次に、田中の学校体験や文化人との交流をもとに、こうしたイメージがどのように形成されたのかその背景を分析。最後に、作品に一貫して流れるノスタルジーの背景を田中の戦後の生活環境（引揚体験・同窓生の交流）から考察した。かつて台北に居住していた在台日本人が、どのように台北という空間を記憶し、それが彼らの人生にどのような意義を与えているのかを、台北高等学校の日本人卒業生を例に議論していく。

キーワード：記憶、台北イメージ、田中一郎、台北高等学校、ノスタルジー

* 本研究は、科技部補助專題研究計画 MOST108-2410-H-263-002-の研究成果である。

一、問題意識

筆者は長年にわたり台湾総督府台北高等学校（以下「台北高校」と略称）¹の学校文化や文芸作品の研究をして来た。これらの研究を通じ、日本が国家建設を牽引する社会リーダーの育成を目的に創設した高等学校が、近代的学識や思想を植民地台湾にどのように浸透させ、後世に影響を与えたのか考察して来た。台北高校は卒業生 2479 名のうち、7-8 割にあたる約 2000 人が日本人学生で、日本人師弟が多数を占める学校であった（楊、1999：50-51）。その中にはほんの一部、台北高校進学のために単身日本本土から渡って来た学生もいたが、大半の学生はもともと台湾居住者で、祖父母或いは親の代に農業開拓移民や官吏・教員、商工業従事者として台湾に赴き、台湾で根を下ろした家庭で生まれた日本人だった。これまで筆者は台北高校の学生達を研究する上で、「エリート教育を受ける者」として彼らを見つめて来たが、本研究では彼らを「生活者」、台北で居住していた在日日本人として見つめ直し、彼らが台北在住中、台北という空間をどう見つめ、イメージ構築したのか？日本帰国後、どのように台湾生活を記憶し、人生の糧にしたか考えた。

日本統治時代の在日日本人の研究として、最も代表的な研究は顔杏如によるものであろう。顔は日本統治時代の初期から末期における在日日本人をマクロな視点（統計資料、新聞記事等）とミクロな視点（個人の回想録や文芸作品等）の両方から観察し、彼らを「植民—被植民」の二項対立的な視点の下での「植民者」としてではなく、「生活者」として見つめる試みをした。また、「人」「空間」「時間」の3つの角度から在日日本人が植民地台湾にどのような経緯で居住するようになり、どのような生活を営み、台北という都市空間に日本的な空間（例えば並木の植樹や建造物）や時間（年中行事、国家行事）を移植したのかを論じた。顔の論点では、在日日本人は帝国（日本）の中の周辺（台湾）に身を置きつつ、その中央都市である台北で近代化・文明化した生活を享受し、移植された日本的風景に「故郷」を重ね合わせ、台湾が本来持つ植物や気候、民俗などの南国性を受け入れていった（顔、2009）。

さて、在台期間に見た生活场景は、日本帰国後彼らの中でどう記憶されていたの

¹ 1922 年「台湾総督府高等学校」として創設。日本本土及び占領地・植民地には戦前に 38 校の高等学校があった。台北高校はそのうちの 1 校で、尋常科（中学校に相当）4 年と高等科 3 年の 7 年制を採用していた。1945 年までの 24 年間に 2479 名の卒業生を輩出した。高等科では、入学時に理科と文科、更に甲組（英語が主専攻）と乙組（ドイツ語が主専攻）にクラス分けし、1 学年 4 クラス（各 40 人）で構成された。校舎や設備は、現在の国立台湾師範大学（台北市大安区）が継承した。

だろうか。台北高校の日本人学生の中には、戦争が激化する前に、日本本土で大学進学したり就職するため帰国した者もいるが、後期の学生たちは戦争中も台北高校に在学中だったり、台北帝国大学に進学していたり、台湾に根を下ろすつもりだった家族が台湾に残っていたりした。そうした人々は日本敗戦により、主に1946年3月から1947年5月にかけて日本に帰国した。この集団移動を日本語では「引揚」というが、本論文の研究対象『絵本 台北の歌』（田中、2011）の著者田中一郎も正にこの引揚者の一人である。植民地・占領地に居住していた日本人が、日本敗戦を経ての帰国後にその土地での体験や見聞を文学作品にしたものを「引揚文学」と呼ぶならば、『絵本 台北の歌』もその一つと言えよう。

原佑介は引揚文学の作者にとって日本とは、祖国でありながらむしろ異国のように認識され、作者はかつて居住していた植民地のほうに原初的な愛着を抱き、そこで培った感情を生き方の根底に据えていると指摘した（原、2013）。朴裕河も、引揚文学を発表した作家の多く（例えば五木寛之、安部公房）は青少年期に植民地で過ごし感受性が植民地で養われたことを指摘。生活習慣や言葉の面で日本に同化することはできても、記憶においては同化できなかった、日本は戦前戦後を通して日本を離れなかった日本定住者が主流を占め、引揚者は特に終戦直後の混乱状態の日本においては「無駄飯食い」「異邦人」として蔑まれ、引揚者自身も祖国における内地体験を劣等感と優越感が入り混じった状態で受け入れた、そして本土（内地）との関係性、占領地・植民地との関係性、引揚者同士の関係性も考慮に入れてこそ、初めて引揚文学の全容が理解できると提言した（朴、2013）。

また、「引揚文学」という枠組みではないが、在台日本人或いは湾生日本人の故郷喪失感や台湾へのノスタルジーを扱った映画や書籍も、昨今注目を集めている。住み慣れた土地を追い出された人々が戦後、昔居住していた土地にどのような愛着や複雑な思いを抱いているか論じたものとして、例えば湾生鈴木れいこの著書『台湾 乳なる祖国：娘たちへの贈り物』（鈴木、2014）について分析した黄錦珠や蔡知臻の研究がある。黄錦珠はこうした個人的な手記は、異なる個人が異なる角度で声を挙げることで、歴史の新たな地表を浮き上がらせ、戦後台湾の歴史に多層性を与えてくれると評価した（黄、2014）。また、蔡知臻は鈴木が表した台湾に対する空間記憶は、幼い日々への思念と望郷意識を表明するとともに、アイデンティティ形成の核心的要素になっていると指摘した（蔡、2017）。

台北高校の日本人卒業生についての研究を見てみたい。卒業後作家になった人物の作品論については、河原功が中村地平（第3期文甲）の、鳳気至純平が濱田隼雄（第

2 期文乙) の研究を既に発表している(河原、1997；鳳気至、2012)。これらは作家の作品世界に台北高校時代を含めた台湾生活体験や、卒業後の生活環境が作品に与えた影響を論じている。

本論文で取り上げる田中一郎は決して著名人でも職業作家でもない。では、なぜ本研究では『絵本 台北の歌』を考察の素材として取り上げるのかについて、理由は 2 つある。まず一つは、『絵本 台北の歌』は非常に具体的に台北の各所が登場し、版画と絵と詩を組み合わせ、1930-40 年代の台北が日本人青少年の目にどのように映っていたのか如実に描写された作品となっている点である。もう一つは、田中一郎が編集発行した 1959 年の初版を見て共鳴した台北高校卒業生徳丸薩郎(第 18 期文甲)が 2011 年に新たに編集発行し再版したという背景がある点である。この冊子は、いわば台北高校同窓生の合作といえるからである。

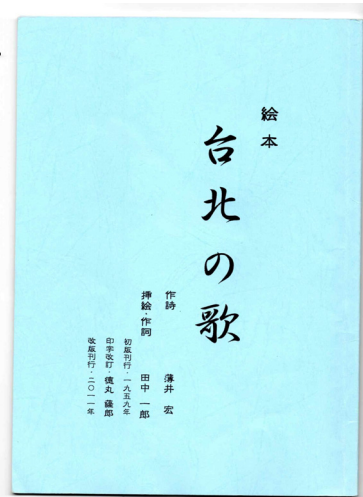
本研究では、『絵本 台北の歌』の製作過程を、①台北の場景・事象を見る→②対象を観察・解釈する→③イメージとして具象化する→④記憶する→⑤絵や詩・文に描述する→⑥作品として仕上げるという 6 段階で捉えた。この中の②にあたる対象に対する観察や解釈には、どんな視点や作者の価値観が作用したのか？その視点や価値観は作者のどんな生活体験や人脈が関係したのか？また、こうしたイメージはどう形成され、強化され、共有されていったのか？

著名な作家であれ、湾生日本人であれ、先行研究が取り上げた日本人たちの元居住地台湾に対する描写には、おおむね肯定的なイメージが付与されている。幸福、天真爛漫だった幼少期とオーバーラップし懐かしく美しい場景、自分の人格や価値観の基礎を築いてくれた大切な場所……このように描かれることが多い。本研究の『絵本 台北の歌』もその域を脱していない。それはなぜなのだろうか？作品全篇に一貫して溢れるノスタルジーという概念を軸に、田中をはじめとする台北高校日本人学生が経験した引揚体験と、戦後の同窓生同士の交流を通じて考えてみた。本研究を通して、生活者としての台北高校日本人学生の台湾に対する視線、記憶のあり方を提示していく。

二、『絵本 台北の歌』と著者について

まず、本研究の主要な分析対象『絵本 台北の歌』とはどのような出版物で、どんな作品で構成されているのか簡単な輪郭をここに描く。更にその著者である田中一郎(版画・文の製作)と薄井宏(詩の製作)、そして 2011 年版の編集者である徳丸薩郎

の略歴を紹介しておく。



図一 『絵本 台北の歌』表紙

(一) 『絵本 台北の歌』とは

この作品の一番大きな特色は、3つの時間点で製作・編集がされた点、そして3人の人物が関わっている点である。まず3つの時間点から説明すると、田中の版画は彼の台北二中・台北高校在学中（1935-1943年）に製作され、薄井の詩も台北二中在学中の1936-1941年に製作された。つまり、1930-40年代に目にした風景を、彼らがリアルタイムで詩や絵にしたわけである。これを第一の時間点とする。この版画と詩を日本に持ち帰り、1959年田中が36歳の時に編集して自費出版した。これが2つめの時間点である。この初版『絵本 台北の歌』は2011年に田中の説明文を加え、徳丸薩郎の手により再編集され、再版された。これが第三の時間点である。

1959年版は田中たちの手元にも既になく、本研究では2011年版を分析素材とした。これは全部で27ページ、カラーコピーした紙を製本したB5サイズの小冊子である。1ページにつき1タイトルを設け、それぞれに版画・文・詩がついていて、一つの小作品として完結している。こうした小作品が21ページにわたり21編ある。3つの時間点の作品が整理されたものがこの2011年版で、徳丸薩郎による解説や附録資料もついた完全版といえよう。1959年版、2011年版共に台北高校の卒業生組織である蕉葉会や田中の友人、版画の学生等に配布された。『絵本 台北の歌』は公に出版されたものではなく、あくまで仲間内で見せ合う小冊子なので、発行部数はせいぜい50-100部かと思われる。しかし、1930-40年代の台北の场景が21編にわたり描き出されていて、

一つの史料としても価値があると思われる。

21 の小作品につけられたタイトルは下記の表のとおりで、例えば「一、幼き夢」を例にとると、「幼き夢 われら南の島の子は 黒潮渡る風を食み 炎の夏の陽を享けて 幼き夢を育みし」という薄井の詩の下に、田中が 9 行の回顧文を書き、詩の左に紙面半分くらいを割いて台湾の島の上に子供が数人いる版画がレイアウトされている。詩と文と絵がお互いに内容を補い合い、正に絵本の体裁となっている。

表一 2011 年版『絵本 台北の歌』構成

掲載頁	タイトル	内容
表紙		
目次		
1	一、幼き夢	本編作品
2	二、淡水河	
3	三、戒克	
4	四、夕焼空の蝙蝠	
5	五、ガジュマルの樹	
6	六、大正公園	
7	七、雨の季節	
8	八、佛桑花	
9	九、夏来たる	
10	十、想（ママ）思樹並木	
11	十一、城門	
12	十二、赤煉瓦の農家	
13	十三、台湾泥鰌	
14	十四、士林の釣り	
15	十五、人力車	
16	十六、宵の丸公園	
17	十七、城隍廟の祭	
18	十八、洗濯場	
19	十九、歳末	
20	二十、たなびく煙	
21	二十一、墓地	

掲載頁	タイトル	内容
22	解説	
23	台北市内学校一覧	附録
24-25	大正街人名録	附録
26-27	台北市大観	附録

（出典：筆者作成）

附録に「大正街人名録」があるのは、3人の居住地がいずれも台北市大正町（現在の長安東路一帯）²だったからである。

（二） 田中一郎の略歴

『絵本 台北の歌』の版画と文、1959年版の編集発行を担当した田中一郎は1923年に東京にて、父義剛・母秀子の長男として誕生した。義剛は慶応義塾大学理財学科卒業後、日本勧業銀行に勤務。台北支店への赴任により、一家（義剛・秀子・一郎・妹2人・弟）は1934年9月³に渡台。台北市大正町2-15の居宅に落ち着いた。12歳だった一郎は台北市立樺山尋常小学校（6年生）に転入、翌年4月に台北州立台北第二中学校⁴に入学。文芸部に入り、薄井宏と活動を共にした。1941年4月、台北高校文甲クラス（第17期）に合格。クラスメートには李登輝がいた。ここでも一郎は文芸部に属し、その出版物『翔風』の編集・執筆に携わった。1943年9月、東京帝国大学文学部東洋史学科に合格し、日本へ渡る。ところが戦争の激化にともない、学徒出陣が施行され、同年12月一郎も大学進学後わずか4か月で召集令状を受け入営。1944年1月ティモール島へ向かった。しかしその移動中に米軍の魚雷攻撃を受け航行不能となり台湾高雄港に上陸。その後は台湾で高射砲陣地の部隊に転属されたものの、敵機の爆撃で負傷。3か月後部隊に戻り、そこで終戦を迎えた。

1946年4月田中家は引揚をし、一郎は翌年4月東京大学に復学するも、東洋史学科

² 現在の台北市中山北路以東、新生北路以西、南京東路以南、市民大道以北のエリア。日本時代初期は「三板橋」と呼ばれた地域で、1922年に町名改正で三板橋の一部が「大正町」となった。この一帯は台湾土地建物会社により住宅開発が進められ、一条から十条までの通りには官舎や高級住宅が並んだ。1915年に鉄道の淡水線が増設された際に、「大正街」という駅が出来たことから、「大正街」と呼ぶ人も多い。西川満、早坂一郎、杜聡明等、著名人も多く居住した（台北市役所、1940：202-203；陳、2011）。

³ 田中一郎の自叙伝『思い出の記』（田中、2016：23）には「昭和10（1935）年9月初旬」に台北へ転居したと書かれているが、台北二中の名簿を見ると、田中一郎は第14期生で、1935年4月入学となっている。それを考えると、田中一家の渡台は1934年だと推定したほうが妥当である（台北第二中学校同窓会、1943：84-92）。

⁴ 1922年創設。1946年1月に「台湾省立台北成功中学」に改名。

は定員超えとなったため、やむなく考古学科に移った。ここから彼の考古学研究生活が始まった。同年7月、静岡県登呂遺跡の発掘チームに参加した後、宮崎県西都原遺跡の調査団にも加わった。1950年東京大学卒業後いったん埼玉県立松山高校で社会科教員となったが、1951年結婚後教職を辞し、奈良文化財研究所の考古学科技官の職位を得て、平城京内の寺院発掘調査などにたずさわった。

1957年次男誕生の際、彼に転機が訪れた。発掘調査で長期間家を不在にしがちだった彼は、教員の妻を支え子育てに参与したいと考古学研究から身を引く。その後は、地元の埼玉県坂戸市公民館館長に就任。成人式や老人会活動の企画、坂戸市史の編纂に従事した。また父親が戦前の台北でロータリークラブ会員だったこともあり、ロータリークラブ坂戸支部創設に関わり、ガバナーに就任。台湾時代から得意だった版画を自宅で教えたりした。考古学研究の第一線からは退いたものの、地域文化活動の功績が認められ、1994年には地域文化振興文化大臣賞と勲五等瑞宝章を受章。筆者の2018年8月の訪問では、次男一俊氏も同席し、「父は子供の時から家庭環境がよく、台北ではお坊ちゃまのような暮らしぶりでした。そのせいか、お金や名誉にこだわらない人です」と語った（田中、2016；津田、2018a）。

（三） 薄井宏と徳丸薩郎の略歴

『絵本 台北の歌』の詩の作者である薄井宏は、1924年台湾で生まれた。第15期生として1936年4月に台北二中に入学。同窓会名簿を見ると、住所は「大正町 2-54」とあり、田中一郎の自宅と非常に近い。田中は薄井とは台北二中での友人だと語ったが、実は学年が一つ違う。もしかしたら大正町で隣人として知り合ったのではないかと推測できる。一郎が台北高校に入学した一年後、薄井は日本の宇都宮高等農林学校へ進み、これにより彼ら2人の間の連絡は途絶えた。このことから、薄井が作った21編の詩は二中在学中の1936-1941年の間に製作されたことが特定できる。

1950年から彼は宇都宮大学農学部林学科に勤務。以後1987年に逝去するまでの37年間、植物社会学の研究と指導に邁進した（福嶋、1987）。薄井についてこれ以上詳しい経歴や家庭背景についてはわかっていない。田中一郎によると、彼ら2人はよく一緒に短歌を作り、一高の寮歌や三高の逍遥歌をハーモニカを吹きながら歌ったそうである。薄井が1941年に入った宇都宮高等農林学校は宇都宮大学の前身⁵なので、薄井は母校の教授になったわけである。更に宇都宮大学の校歌の作詞者を見ると、そこに

⁵ 「国立大学法人宇都宮大学沿革」によると、宇都宮高等農林学校は1922年10月に創立。その後1944年4月に宇都宮農林専門学校に改名、1949年5月宇都宮大学農学部となった（宇都宮大学、2020）。

薄井宏の名があった。このことから、彼が中学時代に愛していた作詩をその後も続けていたことがうかがえる。

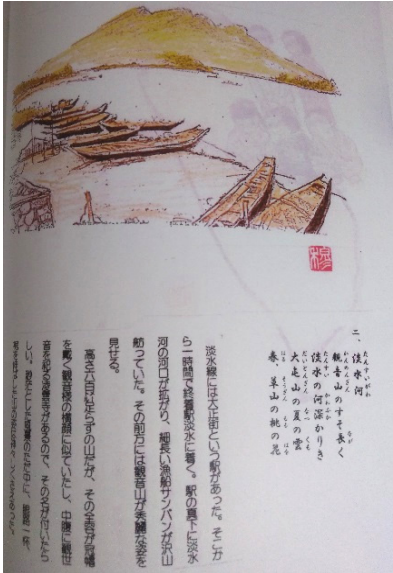
もう一名、2011年版の編集発行者が徳丸薩郎である。彼は1959年版の『絵本 台北の歌』を台北高校の1年先輩である田中一郎より贈呈され、その内容に感銘を受け、再編集・再版を申し出た。徳丸薩郎は1924年台北市大正町1-7にて理髪店を経営する両親の元で生まれ、台北市立建成尋常小学校を経て、台北州立台北第一中学校に進んだ。その後、1942年に台北高校文甲クラス（第18期）に進学。日本帰国後、九州大学に進学。その後日本専売公社に勤めた。台北高校の卒業生組織「蕉葉会」の副会長を務めた他、建成尋常小学校卒業生を中心とする人々の文集『がじゅまるの追憶』の主編も務めた（徳丸編、2002）。田中、薄井、徳丸の3人とも大正町に居住していたが、田中と徳丸、徳丸と薄井は当時はお互いに面識はなかったという（津田、2018b）。奇遇なことに、徳丸が専売公社水戸支店に勤務中、農業専門家として該社顧問に就任したのが当時宇都宮大学農学部部長だった薄井宏だった。そこで『絵本 台北の歌』について話に花が咲いたことも、2011年の再版を後押しすることになったと思われる。

三、作品分析

本編作品は21ページにわたり、21のタイトルでそれぞれ版画・文・詩を組み合わせ構成されている。版画には色が付けられている。詩は全て4行で完結し、どの行も七音五音で構成される、いわゆる「七五調」となっている。七五調は日本語の詩や句に最も適していると言われ、新体詩にも七五調が採用されている。文はどのページも10行前後でまとめられ、ある文中箇所に「昭和60年代、台北を訪れた時」という記述があることから、2011年の再版の時に加筆されたことが推定される。つまり、1930-40年代に台北で作られた詩と版画に、2011年に田中がその詩と版画を補足する形で文を入れた。紙面は、だいたい図二のようなレイアウトになっている。

（一） 本編作品のタイトルと素材

21編のテーマで展開する本編作品を通して、どのような台北イメージがここで表出されているのか見て行きたい。そこでまず各テーマの詩・文・版画で取り上げられている素材を、①地点、②自然事物、③人物、④食物・文化の4つに分類してまとめた。



図二 『絵本 台北の歌』本編頁

表二 『絵本 台北の歌』各タイトルと素材一覧

タイトル	地点	自然事物	人物	食物・文化
一、幼き夢	大正街、東門町	黒潮	南の島の子	
二、淡水河	観音山、淡水河、大屯山、草山			サンパン
三、戒克	淡水、アモイ、福州、大稻埕、延平公園、台北橋、淡水橋		船頭、水夫	ジャンク
四、夕焼空の蝙蝠		蝙蝠		
五、ガジュマルの樹		ガジュマル	男の子、女の子	
六、大正公園	大正公園、建成小学校、樺山小学校		子供	ガス灯
七、雨の季節	御成街道、大正街	リュウゼツラン	学生	水銀灯
八、佛桑花(ママ)	台北一中、台北二中	仏桑花、ハイビスカス、雨、木立、サク	日本の子供	

タイトル	地点	自然事物	人物	食物・文化
		ラ、サンコタイ		
九、夏来たる	農村	龍眼、榕樹、ビンロウ、水牛、アヒル、スコール	村童、老爺、少年	
十、想（ママ） 思樹並木	新店溪、蚩橋、景美	蝉、台湾カラス、相思樹	薄井君	カムチャ（サトウキビ）
十一、城門	三線道路、大正街、御成町踏切、大学病院、東門、高等学校、海軍武官府		美人	
十二、赤煉瓦の農家	田んぼ	水牛、孟宗竹の竹藪、水トンボ、水蛇、亀、鯉、鮒、すっぽん、アヒル、水牛	台湾人	農家
十三、台湾泥鰌	大正街、ドンドン川、水田、大安川、三板橋	浮草、コウタイ（台湾泥鰌）、ホテイソウ	近所の男たち	釣り
十四、士林の釣り	士林、大直川、台湾神社	鉄砲水、紅鰻		
十五、人力車	大正街、城内		車夫、林巖	人力車（トワチャー）
十六、宵の丸公園	丸公園、大稻埕、日新町、太平町	夕焼け	教護連盟の先生、高校生	台湾語、煉瓦屋、支那そば、饅頭、水菓子、アイスクリーム、老酒、台湾語
十七、城隍廟の祭	城隍廟、路地	茉莉花	楽師、纏足のお婆ちゃん	金紙、銀紙、銅鑼、爆竹、謝將軍、范

タイトル	地点	自然事物	人物	食物・文化
				将軍、チャルメラ
十八、洗濯場	河岸、河原		チャボラン(女中)、中年のおばさん	
十九、歳末	西門市場、本町通り、新高堂、停仔脚、新公園、栄町、辻利茶舗、菊元、梅月堂		平野清君	福引抽選
二十、たなびく煙	ビール会社、大正街、ドンドン川、大安十二甲、松山の飛行場、三張犁、六張犁	夕焼け、煙		夜釣り
二十一、墓地	三板橋、ドンドン川、大正街九条、森、墓地		乃木大 将母堂	試胆会、葬式、鐘楼の鐘

(出典：筆者により作成)

1. 地点

田中も薄井・徳丸も大正町に居住していたこともあり、大正町が取り上げられている作品が多く、8編もある。大正町を中心に北は草山、大屯山、観音山、淡水、台湾神社、士林、大直川、松山空港。南は景美、新店。西は城内、大稻埕、万華、西門、新公園。東は三張犁、六張犁、大学病院、高等学校が登場する。繁華街でいうと、日本人がよく往来したであろう城内、本町、栄町その他、台湾人居住区とされる大稻埕へも安くておいしい台湾料理を食べに行ったこと、台湾の伝統的な祭りを見学したことが書かれている。具体的な施設としては、辻利茶舗、菊元百貨店、梅月堂、ビール工場が出て来る。

ビール工場は田中の文によると、大正町の一番奥にある橋から煙突の煙が見えたそ

うで、同じく大正町から見える場所としては三板橋の墓地にも触れられている。薄井の詩では、三板橋の葬儀の鐘の音が聞こえたことが描かれている。他にも大正公園では子供たちが暗くなるまで遊んだこと、そこにあったガジュマルの木に登ったこと等も書かれている。それから大正町の中にある「ドンドン川」で釣りをしたことも書かれている。郊外に目を向けると、士林、大直、淡水、新店などが登場するが、これらの場所に自転車に乗って出かけ、釣りや水泳に興じたことが楽しい思い出として語られている。少年田中と薄井が縦横無尽に台北を駆け回っていた情景が、読者の目にも浮かんで来るような描写になっている。

2. 自然事物

まるで歳時記のように、『絵本 台北の歌』にはたくさんの動物や植物、自然現象が出て来る。夕日、茜色の雲、夕立といった自然現象が美しい風景として登場する。例えば夕日では、台北の夕日は火山の噴火のように強烈な赤色をしており、そこに蝙蝠の一群が舞っているという場景が印象的に描かれた。

動物でいうと、蝙蝠の他に水牛、アヒル、水蛇、水トンボ、亀、鯉、ナマズ、すっぽん、赤マス、台湾ドジョウなど現在の台北市街地ではあまり見られないものも出て来る。植物では、ガジュマルが何度も登場する。ガジュマルは、その気根にぶら下がってターザンごっこをしたり子供たちの格好の遊び相手だった。日本の本州ではあまり見られないこの木で遊べるのは、正に台湾に住む子供たちの特権といえよう。植物の他には、リュウゼツラン、桜、龍眼、孟宗竹、浮草、茉莉花、仏桑花（仏桑華）、相思樹が出て来る。

3. 人物

人物としては、日本人の大人はあまり登場しない。子供を迎えに来た母親、教護連盟の教師たち、それに三板橋墓地の所で乃木大将等が出て来ただけである。一方、子供はそれと対照的によく登場する。「一、幼き夢」の中の「南の島の子」とは田中や薄井ら台湾に住む子供たちを指し、彼らがこの冊子の主人公である。

とはいえ、その子供の目を通した大人として台湾人が多く出て来る。例えば船頭、楽師、農夫、車夫、釣り人で、主に労働する人々である。「チャボラン」と呼ばれる台湾人女性も登場する。チャボランはここでは日本人家庭の家事手伝いをする台湾人女性を意味し、田中は彼女らが川辺で日本人の衣服を洗濯しながらかしましくおしゃべ

りをする様子を版画で描いている。

4. 食物・文化

食物や文化に関わる素材として、田中の文の中に「カムチャ」（サトウキビ）、「トワチャー」（人力車）、「サンコタイ」（とかげの一種）といった台湾の現地語が出て来るのが印象的である。こうした言葉が在台日本人の間に普及していたことがわかる。他にも、田中たちが台湾のローカル文化を受け入れたことが感じられる描写として、大稻埕の丸公園に行って、喧噪の中で安い「支那そば」や饅頭、水菓子、アイスクリーム、老酒などを飲食するシーンを描いている点である。食欲旺盛、好奇心旺盛な青少年は、こうしたものに心ひかれたのだろう。

また行事としては、城内の歳末くじ引き、三板橋での肝試し、葬儀、夜釣り、城隍廟の祭りなどが季節の風物詩として再現されている。日本人居住者が多かった大正町では、日本式の月見などが行われていたが、⁶そのことよりも謝將軍、范將軍が体を揺らしながら歩くさま、にぎやかな爆竹や音楽とともに城隍廟の祭りの方を忘れられない场景として描いている。また、『絵本 台北の歌』では室内の场景は一切出て来ない。青少年にとって、室外こそ刺激に満ち、好奇心や感受性を刺激する場だったのかもしれない。

（二） 表出された台北イメージ

こうした 21 編の小作品からは、どのような台北イメージが見えてくるだろうか。
①牧歌的、②都会性、③生命力、④台湾性の 4 つに分類した。

1. 牧歌的

のんびりとした空間の中で、楽しく無邪気に遊ぶ子供の姿が全面に押し出されており、この小冊子の主人公は子供だといえる。例えば「五、ガジュマルの樹」では、子供たちがガジュマルに上り、ターザンごっこをし、この木の下ではみんなが友達にな

⁶ 台湾日日新報では、1910 年代の古い記事しか確認できなかったが、住民の行事があったことが報道されている。例えば 1914 年 8 月 30 日、07 版の「大正街の観月会」。「台北の市外に新しく生れた大正街の有志者に依って明三十一日天長節の夜を以て大正街大観月会を開催する事となった」。他にも 1914 年 10 月 19 日、05 版の「草山行 大正街連の」では、住民 40 名で北投・草山に遊びに行ったという記事もあった。

れたと書かれている。「六、大正公園」では、子供達がドッジボールで遊ぶ様子、また建成小学校の子供も樺山小学校の子供も、ここで一緒に仲良く遊んだこと、時間が過ぎるのを忘れ日が暮れて母親が迎えに来るまで遊んだことが書かれている。「九、夏来たる」では、ビンロウやガジュマルの樹が甘い匂いを放つこと、村では子供が水牛に乗ってアヒルを追う様子、竹棹を持って駆け回るのどかな田園風景が切り取られ描写されている。「十二、赤煉瓦の農家」では、農村の池の周りの竹林に生息する動物たち、そこで魚を捕る遊びに興じ、それを叱りもせず許してくれた農民の様子が書かれている。特に夏休み中遊びに行った先の場景が多く描かれており、牧歌的な田園風景と子供の楽園がイメージとして展開している。

2. 都会性

「十九、歳末」では、西門市場や本町通りにおける歳末の賑わいが再現されている。新公園の出口から栄町、京町、本町へと出て、その交差点に新高堂書店、菊元百貨店、辻利茶舗、梅月堂が見える。広い道路には車が行き交い、人々は「停仔脚」を歩き、そこには明るい電灯が灯っている。「七、雨の季節」では、雨の日の御成街道の水銀灯の光が印象的に描写されている。御成街道とは台湾神社に延びる大きな道で、台北の主要な道路だった。車が往来する大きな道路と水銀灯は、台北の都会性・文明の高さのシンボルといえる。また、大正公園の広場にはガス灯があり、ガス灯に火が灯ったら帰宅する時間だったことも懐かしく書かれている。大正町には公園以外に、プールやテニスコートもあった。『絵本 台北の歌』の中では特に触れられてないが、この街は台北市内の中でも高級住宅地で、洗練された空間だった。徳丸薩郎の自宅は大正町で理髪店を営んでいたが、当時の写真を見ると看板には「Hair dyeing & waving TOKUMARU HAIR-DRESSER Telephone No.2969」と英語で表示されていて、ハイカラな造景に一役買っている。



図三 徳丸理髪店入口（提供：中田芳子氏）

3. 生命力

「三、戒克」では筋骨隆々の日焼けした水夫が長い櫓をこぐさまが描写され、田中は文で、こんなみすばらしい船が台湾海峡を渡れたことに驚嘆している。「十五、人力車」では薄井が詩で、風のない夏の午後、木陰で休む車夫の様子を描き、それに呼応する形で田中が文で父親が雇っていた「林巖」という台湾人車夫が大正町の自宅から城内まで1里の距離をたった15分で走ったことを述懐している。「十八、洗濯場」では台湾女性たちが川辺でかしましくおしゃべりしながら洗濯をする様子がいきいきと再現されている。躍動感や生命力は、こうした台湾人の様子以外に、「十、相思樹並木」で薄井と田中が新店溪に泳ぎに行った時、路上の蟬の声を聴きながら、サトウキビを食べたシーンなどからも感じ取れる。大正公園やガジュマルの樹で遊ぶ子供達も、正に生命力の塊である。そしてガジュマルも相思樹も、台湾俳句の歳時記を見るとどちらも「暑い頃」の季語となっている（黄、2003：9-11）。強烈な暑さと、これら植物が田中の中で強い生命力のシンボルに映ったと思える。

4. 台湾性

上述の「十、相思樹並木」の文には冒頭に「台湾は暑かった」とある。小学6年生から台湾に住み始めた田中にとって、台湾の暑さは強烈な印象を残したのだろう。「九、夏来たる」でも台湾の暑さ、そして盛夏での夕立が描かれ、薄井も詩で「花咲き匂う里の風、龍眼熟れて夏は来ぬ、榕樹の並木吹く風は、我が揺籃の唄なりき」と龍眼やガジュマルという台湾特有の植物を取り上げつつ、台湾の夏の空気感を切り取った。

「十六、宵の丸公園」では台湾の異国性も強調されている。ここでは台湾人の家が赤煉瓦がよく使われること、日新町と太平町の十字路にある丸公園で喧噪や料理の湯気の中、高等学校時代に老酒を飲み、青春を謳歌したことが書かれている。また「十七、城隍廟の祭り」ではこれが「支那の祭典」であること、そして銅鑼や爆竹の音、金紙や銀紙を燃やす煙、纏足の老婆や神々の行進の様子が描かれ、その老婆からは茉莉花の香りがしたことも書き添えられている。異国情緒あふれる祭りの様子、それを驚きの目で見える作者の視線がある。生まれた時から台湾に住んでいる湾生と違い、田中は12歳から住み始めた（薄井と徳丸は湾生）。台湾のローカル文化や気候を受け入れつつも、異国・他者として見つめる視線が田中の文ににじみ出ている。

四、「台北」イメージの形成背景

上述したイメージが構築される際に影響を与えたであろう、田中の観察・解釈の視点はどう形成されたのだろうか。ここでは、田中の学校体験と人脈に基づきその背景を考察する。次に、作品全体に流れるこの作品の大きな特質＝ノスタルジーは、田中の戦後におけるどんな生活体験が生み出したものなのか、引揚と同窓生との交流という2つの観点から分析する。

(一) イメージ形成における視点はどう形成されたか

1930-40年代の台北が在台日本人によって構築された台北に対する空間イメージは、どのような視点に基づくものなのか？そうした視点は作者のどのような体験に基づき形成されたのか？肯定的なイメージが中心なのはなぜか？田中一郎の学校体験と文化人との交流の二側面から考察してみたい。

1. 学校体験から

小学6年生で日本から台湾に転居してきた田中一郎が、本格的に植民地の学校に馴染んでいくのは中学校からである。彼は1935年4月に台北二中に入学した。田中の入学年より少し後の資料になってしまうが、1939年4月の調査を見ると、台北一中の台湾人学生と日本人学生の割合が28人対963人なのに対して、二中は508人対217人で、二中の学生は圧倒的に台湾人が多い（台湾総督府文教局、1940：27）。田中の学年でも台湾人が93人、田中をはじめとする日本人は36人のみである（台北第二中学校同窓会、1943：84-92）。田中の学年では3クラス中、2クラスの級長は台湾人学生が務めた。日本人学生が大半を占める小学校や他の中学とはかなり異色な、台湾人が幅を利かせる学校だったことがわかる。ここで田中は民族の垣根を超え、友情を育み、台湾人同級生にも差別なく敬意の念を抱いた。例えば、こんな述懐がある。「陳樂芳⁷は作文を書かせれば全島一の文才を持ち、数学でも林ちゃん先生⁸の十傑に私、彭東祥、陳英茂、黃國華の四人が入る」という風に優秀な同級生を誇りに思っていることを述べている。

台北高校入学後は柔道、剣道、弓道の有段者も多い文武両道のクラスメートに恵ま

⁷ 上記名簿には「陳蓴芳（ちんがくほう）」とある。

⁸ 台北二中唯一の台湾人数学教師「林景元」教諭のことだと思われる（黄編、2012：41-53）。

れた。その中の一人に前総統李登輝（1923-2020）もいた。田中の口述によると、李とは同じ汽車通学組として高校から駅までの道中を一緒に歩き、時には汽車に乗車する前にソバを食べたという（津田、2018a）。台北高校における田中の主な活動といえば、文芸部だった。台北高校文芸部には歴代、中村地平、濱田隼雄、王育霖、辜振甫といった人物が在籍し、台北高校の顔ともいえる文芸誌『翔風』を編集・発行していた。田中の在籍中には1年上に王育徳、邱永漢もいた。栄町の光食堂での新人歓迎会に彼らがいたことを田中は覚えている。文芸部では俳句会や短歌会が教師や生徒の自宅で開催された。短歌には社会性こそ大事という教師と、叙情性こそ大事だという生徒の間で議論になったことを田中は回想している。中学の短歌仲間には見られないむき出しの心、教師と生徒が対等に議論できることに彼は驚嘆した（田中、1970：161-172）。

高校在学中に、田中の物の見方や解釈に影響を直接与えた出会いは他にもある。まず一つは、日本本土の高校生が作った雑誌を見たことである。田中はある日、文芸部の先輩の下宿を訪れ、そこで日本の学習院高校が発行している『輔仁会雑誌』を見せられた。「巻頭に収められた色刷りのスケッチ画、みごとな絵であった。それに伴う短文もすばらしい。これだ。これこそ私の求めていたものだと思った。私も絵が描ける。そして版画も彫れる。台北という南国の風物を、この絵と文で表現するのが、私の仕事だと思った」（田中、1970：167）。これが刺激になったのか、その後田中はスケッチブックを持って台北の町を歩き回り、西洋館、廟堂、街角をスケッチするようになる。

第二の刺激は、クラス担任の島田謹二から受けた。ある日島田は田中にある女流歌人の小さい歌集を貸してくれた。田中はここで大きな衝撃を受けた。「無名の女流歌人の資料を、英文学の先生が集め論評している！文学には考証の学がある。新しい分野に目を開かれた感動。考証という未知の学問がそれから私の心を奪い歴史を専攻する遠因になった」（田中、1970：164-165）。田中はこの2年後、東大で考古学を専攻し、考証の道を究めていった。専門分野にだけ固執することなく、謙虚に胸襟を広げ、考証するべきであるという誠意ある姿勢を島田から吸収したといえよう。田中が台北の事象を見つめる際も、こうした視線が作用したのではないだろうか。

更に、当時の時代背景も見てみておきたい。田中が高校に在学している間、学校から台湾神社への参拝、下川校長による詔書奉読式、教師たちの出征等が増え、1941年12月の太平洋戦争開戦以降、校内の軍事化は急速に進んでいく。在校軍人による「軍事研究会」が発足したり、銃剣術を習い始める学生も増えた。校内のこうした変化を、田中は後でこう振り返っている。「自分も（軍事研究会への）加入を勧められたが、それだけの飛躍についていくのがためらわれた。そのせいか、文芸部は軟派だとののし

られた。しかし、私は軟派でもよい、文弱の輩でもいい、戦いに出るまでは文芸部を守らねばいけない」(田中、1970: 172)。台北の町を徘徊しスケッチしたこと、文芸部で短歌や俳句創作に精を出したこと、考証の重要さに気づき将来の道を模索したことは、田中なりの当時の風潮に対する反発であり、自由や平和、博愛への渴望の表れだったともいえる。こうして台湾人が半数を超える台北二中で民族の壁を超えて友を敬愛する心を育み、台北高校では文芸への情熱、対象を虚心で観察する真摯な態度、謙虚な姿勢を学んだ。こうした態度や視点が、台北の場景・事象を観察・解釈する際に常にフラット(公正)な目線で、偏見や差別的な色眼鏡で見ない姿勢につながったのではないだろうか。

2. 文化人との交流

田中の周囲には、学校関係者だけでなく台北在住の日本人文化人も多くいた。そしてそれは台湾という空間を見つめる視点や、将来の進路にも影響を与えた。まず、版画の師匠となる立石鉄臣との交流があった。絵を描くことが好きだった田中に、父親の友人で台北高校美術講師だった塩月桃甫が「一郎は版面向きだ。だから立石君の所で版画を習いなさい」と勧め、それから立石に師事するようになる。立石は、台湾の衣食住、各業種、日常用品といった庶民生活を足で歩いて観察したという。立石にとって台湾の風景は自身の存在を確認するためのもので、彼は台湾文化の多元性を欣賞し、双眼を開いて胸襟を開けてこの土地の風情人情を理解しようとしたと、後世の研究者に評価されている(邱、2004: 69-92)。田中の台湾に対するフラットな視線、そして頼もしい農夫や車夫、チャボラン、美しい風景、情熱的な太陽や熱帯の植物や動物たちへの眼差しは、こうした立石の版画に対する姿勢から影響を受けたように思える。

その立石と1935年に「創作版画会」を立ち上げ、台湾のエキゾチック性を強調した描写が特徴的な日本人として、西川満がいる。田中は立石を通じ、同じ大正町住民でもある西川とも知り合い、彼にスケッチ作品を見せた。西川は田中の版画作品を、彼が関わる雑誌に掲載したという。⁹西川といえば、1943年に『臺灣繪本』を出版している(西川編、1943)。西川が編輯責任者で、濱田隼雄、新垣宏一、川合三良、池田敏雄、龍瑛宗らが詩や文を執筆した。各人が抒情詩や随筆……各人が台湾各所の自然風景、動植物、街並みを描いている。台北でいうと、大正町、博物館、新公園などが

⁹ 田中の回想録には、『民俗臺灣』『文藝臺灣』に掲載されたとあるが、目下未確認である。もしかしたら筆名を使用したのかもしれない。

出て来る。台湾の場景、人々の生活風景を見つめる眼差しは、作者一人ひとりまちまちではあるが、牧歌的に描いたもの、南国の異国情緒を強調したものなどが目立つ。版画があり、文があり、詩があるという体裁の点からいっても、台湾の事物への視点からいっても、田中がこの『臺灣繪本』を『絵本 台北の歌』製作の参考にした可能性が十分に考えられる。

また、近所に台北帝大教授宮本延人が住んでおり、田中の母と宮本夫人が懇意だったことから中学三年の時遺跡発掘に誘われる。これが考古学へ目覚めたきっかけとなった。宮本延人に伴われた円山遺跡での発掘活動では、金関丈夫とも車に同乗し、土器や石器を採掘した。このように、父母を通して広がった人脈、台北という居住空間において、田中には美術的素養や空間を捉える目、将来進むべき道を見極める文化資本がたくさんあったことがうかがえる。豊かな家庭環境、両親を通しての在台日本人文化人との交流が田中の心に余裕を生み、彼にとっての台北時代をより豊かで、幸福な記憶にした可能性もある。

(二) ノスタルジーの背景

以上のような環境により培われた視点が台北の場景や事象の観察・解釈の際にフィルターとなって作用し、『絵本 台北の歌』は完成した。上述した4つのイメージを総じてみると、のんびりした田園や公園の他、垢抜けた都会性と同時に熱帯地域ならではの強烈な生命力を宿した環境が台北にはあり、そこで子供は楽しく遊び暮らしたというもので、正にノスタルジーの世界といえる。では、こうした記憶の中の台北、ノスタルジーに満ちた台北の空間世界を、どうして田中達は作ったのだろうか？最後に、彼を取り巻く2つの体験（①引揚体験、②同窓生との交流）から分析していく。

1. 引揚体験

同じ台北高校日本人卒業生といっても、学校を卒業し社会に出てからの経験は人それぞれ様々である。しかし田中と同世代のほとんどの在台日本人たちの共通する体験として、引揚がある。この集団大移動は多くの在台日本人たちの生活、いや、人生を大幅に変えた。台湾から日本への引揚は32万人もの日本人が、千円の所持金と行李一つで輸送船に乗せられ、九州や和歌山の港に降り立ち、そこから親類縁者を頼り日本各地へ散った。日本の植民地・占領地からの引揚者は合計360万人以上にのぼり、これは当時の日本人の人口の9.1%を占める程多いものだった。満洲・樺太・朝鮮といったソ連軍の占領下に置かれた地域にいた日本人は272万人で、この地域からの引揚は

その移動距離の長さ、現地の気候の厳しさ、ソ連軍の侵攻、現地人の報復などで凄惨を極めた（華、2018：53）。これと相対的に台湾は中国政府に接收され、引揚作業は比較的スムーズに進んだとされる（蘭編著、2013：20-21）。とはいえ、生活の基盤全てを台湾に置いていた人々からすると、引揚は青天の霹靂であり、その証拠に 1945 年 11 月 1 日にとった調査では、在台日本人 32 万人のうち、台湾に残りたいと答えた人が 14 万人余りいた（歐、2003）。田中家は高齢の祖母がおり、妹の一人が祖母と病院船で帰国。父母妹弟の四人は米国船で 1946 年 3 月下旬に帰国した。大正町の居宅は中国軍の将校らがやって来て、室内を土足のまま上がられ、家具にはテープを貼りつけられた。田中家にとっては屈辱的な経験だったに違いない。

病院船の護衛を委託された田中は 4 月 3 日に基隆港へ。快適とはいえない船内では 17 名の死者が出て水葬をした。その中には、田中が台湾南部で負傷した時に面倒を見てくれた兵隊の死体もあった。死や病はまだ続く。4 月 10 日に鹿児島到着後、船内に天然痘患者が出たことから一か月下船禁止となった。そして東京に着くや祖母が力尽きて死んでしまう。田中一家は親戚宅に向かうも、どの家庭もとても世話になれる状態でなく、結局、人づてに紹介された埼玉県高坂村の、ある民家の六畳一間に落ち着いた。そこで台北時代とは比較にならぬ質素な生活を営むこととなった（田中、2016：81-87）。

引揚者は外地と違う日本本土での言葉使い、習慣、社会規範にとまどい、日本本土にもともといた日本人たちも引揚者を「招かざる客」として異端視した。同じ日本人でありながら、お互いがお互いを他者として認識したのだ。顔杏如は引揚体験、日本社会に対して抱く「他者」感が在台日本人たちをして、台湾へのノスタルジーへ駆り立て、子供の頃の風景のまま、台湾への思いを深めたと分析している（顔、2009：98-101）。田中にしても、高級住宅地大正町での暮らしと高坂村での六畳一間の生活はきっと雲泥の差で、境遇におけるこのコントラストが、台北へのノスタルジーを強化したと考えられる。

田中や徳丸と同じく台北高校の出身者であり後に作家となった中村地平について、河原功は中村の作品には南方風土、台湾への強い郷愁と憧憬が内在されていて、そこには牧歌的、楽天性、熱情的飛躍などが含まれていた、そしてそれは引揚日本人であった中村の辛い現実との対比として選ばれたものだと指摘している（河原、1997：24-51）。『絵本 台北の歌』にも牧歌的で生命力に溢れたイメージが強く表出していた。田中達にとっても、台北に対する記憶が戦後日本で引揚者として生きる糧、活力となったのではないだろうか。

2. 同窓生との交流

田中の戦後の生活を見て行くと、なぜ帰国して 14 年もたった 1959 年に『絵本 台北の歌』を出版したのか、その理由が 2 つ考えられる。一つは田中の個人的事情で、1957 年彼は家庭での時間を増やすために、考古学研究をやめた。多忙を極めた学生生活に終止符を打ったことをきっかけに、台湾時代に製作した版画や友人薄井の詩を一つの作品集としてまとめたいと思いついたのではないだろうか。もう一つの理由は社会的なもので、1950 年代の日本はまだ観光目的の海外渡航が自由にできなかった。青少年期を過ごした台湾は、遥か「外国」となってしまった。そんな時に『絵本 台北の歌』の発行で、同級生たちと懐かしさを共有しようとしたのではないだろうか。

林初梅は、日本人引揚者の同窓会・同郷会の活動は実は戦後間もない頃から始まっていて、今確認できるものだと台南一中の「南中会」が 1952 年に既に創立していたことを指摘。そして日本が戦後の不況から立ち直り、人々の生活に余裕が出始めた 1960 年代、特に 1964 年に観光のための出国制限が解除されたことで、母校訪問や同窓会活動が活発化したことを論じた。また 1990 年代も台湾の戒厳令解除や、郷土意識の高まりなどが追い風となり、日本時代に創設された学校が日本人卒業生を招待したりし、それが記事になったりもした。田中一郎も、1989 年に総統就任中の李登輝を訪ね、新聞で大きく報道された（張、2019：155-163）。林は日本での苦しい生活の相対的なものとして、台湾での記憶が美しいものになり、台湾こそが故郷だと異口同音に語る日本人が増えたことを指摘した（林、2017：310-333）。

台北高校を例にとると、学年・クラスの単位による組織や連絡は引揚直後からあった。例えば、第 20 期理乙クラス生たちによる『美しき魂』という文集は、1947 年 8 月に第一号、1948 年 6 月に第二号を発行している。日本各地でバラバラになった同級生たちの安否を確認し合い、引揚後の過酷な環境変化を慰め励まし合う大事なツールとして機能した。台北高校全体の卒業生組織「蕉葉会」も 1961 年に結成された。卒業生の編んだ文集を見ると、台湾や台北を「第二の」或いは「第一の」故郷だと呼び、青少年期の屈託のない時間がそこにあったことが語られている。引揚後別々の人生を歩む彼らにとって共通の記憶は、戦前の台北であり、学校生活であった。そのことが同窓会会場や文集の紙面上で繰り返し語り合われ、その記憶は強化されていった。そうして構築された台北イメージは懐かしい場所であり、幸福だった青少年期とオーバーラップし、今の彼らに活力を与えてくれる大切な意味をもたらした。

五、結語に代えて

本研究では、台北高校第 17 期生田中一郎による『絵本 台北の歌』を研究素材とし、台北居住者、在台日本人である田中一郎がかつて住んでいた台北にどんなイメージを持ち、それを作品にどのように表出したのか？イメージ構築の背景を考察した。台北イメージは、①牧歌的、②都会性、③生命力、④台湾性の 4 方向に分けられた。これらイメージ形成の背景を、彼の学校体験及び在台日本人文化人との交流の中に見出した。学校体験では、台湾人学生が多い台北二中で民族の壁を超えて偏見を持たない友情を築き、優秀な台湾人の友人に心からの敬意を示した。台北高校では鋭い観察眼や文学的センスを示してくれる先生や先輩に出会った。日本人文化人との交流では、版画の師匠である立石鉄臣から観察の対象を謙虚な目で見つめることを学び取り、西川満との交流があったことから、田中が西川の編集した『臺灣繪本』のスタイルや、台湾に対する観察眼を参考にした可能性が感じられた。

こうして形成された台北イメージは、1959 年及び 2011 年に『絵本 台北の歌』として形になったが、素朴なタッチの版画、七五調の詩、そして詩と版画の内容を補充するかのように 2011 年に書き足した田中の文、この 3 つの組み合わせで構成された。ここには、1930-40 年代台北をノスタルジーに溢れた空間として描き出されていた。このような空間イメージが構築された背景として、本研究では引揚体験と戦後における同窓生同士の交流を挙げた。引揚体験は、日本人でありながら日本社会に対し疎外感を感じさせ、台湾時代と打って変わった過酷な生活は台湾への郷愁を強化させた。台湾の熱帯性も生きる活力を連想させるものとして、好んで想起させるものとなり、彼らの生きる糧になったことがうかがえる。戦後直後から始まり、1960 年代、更に 90 年代に高まりを見せた同窓会・同郷会は、彼らの台湾への記憶を強化させ、共有させた。

台湾で生まれ育ったり教育を受けた日本人が戦後に書いた大部分の回想文と同様、『絵本 台北の歌』の中で描かれた台湾、台北も肯定的なイメージ中心だった。統治国国民として植民地支配に対する慚愧の念や批判は作品中になかったのかと言えば、確かにこの作品からは見出せなかった。その理由として、このテキストが類似した境遇だった台北高校の関係者らに見せるためのものであり、あくまで「絵本」という体裁にこだわり、童心に帰った気持ちで同世代の仲間と郷愁を共有したいという目的で作られたためだと思われる。一方、田中一郎や徳丸薩郎と同様台北高校卒業生の中にも、日本の植民地政策を批判した文章を残した者もいるので、今後はそうした回想文にも

目を向けて、日本人の台湾イメージ、台湾記憶の分析に新たな視点を提示していきたい。

現代の台湾では郷土意識の高まりにより、地域や学校の歴史を日本時代から振り返り、現代に生きる我々が教訓にできること、文化資源として活用できることを知る取り組みが進んでいる。日本統治時代の生活史、日本語文学作品の研究が進む中で、個人の回想録や日記、仲間内の文集等の史料にももっと目を止め、細かい分析をすることで、台湾と日本の共通の歴史体験への理解に深みが出て来ると言えよう。

引用文献

一、日本語文献

- 「国立大学法人宇都宮大学沿革」，宇都宮大学，<https://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/enkaku.pdf>，検索日：2020.02.14。[Historical Sketch of Utsunomiya University. Utsunomiya University. Retrieved February 14, 2020, from <https://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/enkaku.pdf>.]
- 河原功，1997，『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点——』，東京：研文出版。
[Kawahara, Isao. (1997). *Development of Taiwan New Literature Movement: Contact with Japanese Literature*. Tokyo: Kenbun Shuppan.]
- 黄靈芝，2003，『台湾俳句歳時記』，東京：言叢社。[Ko, Reishi. (2003). *Taiwan Haiku Saijiki*. Tokyo: Gensousya.]
- 顔杏如，2009，「植民地都市台北における日本人の生活文化——「空間」と「時間」における移植、変容」，東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士論文。[Gan, Kyo-jo. (2009). *Life and Culture of the Japanese in Colonial Taipei: Transplantation and Transformation in Space and Time*. Doctoral dissertation, Department of Area Studies, Graduate School of Arts and sciences, The University of Tokyo, Tokyo, Japan.]
- 鈴木れいこ，2014，『台湾 乳なる祖国：娘たちへの贈り物』，東京：彩流社。[Suzuki, Reiko. (2014). *Taiwan As a Motherland: Gifts for Daughters*. Tokyo: Sairyusha.]
- 田中一郎，1970，「開戦前後の文芸部」，台北高等学校蕉葉会，『台北高等学校一九二二—一九四六』，東京：台北高等学校蕉葉会，161-172 頁。[Tanaka, Ichiro. (1970). Literature Club before and after the War. In Taihoku Higher School Syo-yo Association (Ed.), *Taihoku Higher School 1922-1946* (pp. 161-172). Tokyo: Taihoku Higher School Syo-yo Association.]
- 田中一郎，2016，『思い出の記』，未出版。[Tanaka, Ichiro. (2016). *Record of Memories*. Unpublished.]
- 田中一郎挿絵・文，薄井宏作詩，徳丸薩郎印字改訂，2011，『絵本 台北の歌』，未出版。
[Tanaka, Ichiro (Illustration and Writing), Usui, Hiroshi (Poem), Tokumaru, Satsuro (Revision). (2011). *Picture Book: Songs of Taihoku*. Unpublished.]

- 台北市役所, 1940, 『臺北市政二十年史』, 台北: 台北市役所。[Taihoku City Government. (1940). *Twenty Years of History of Taihoku Municipal Administration*. Taipei: Taihoku City Government.]
- 台北第二中学校同窓会, 1943, 『創立二十周年記念同窓会名簿』, 台北: 台北第二中学校同窓会。[Alumni Association of Taihoku Second Junior High School. (1943). *The Alumni Association List of the 20th Anniversary*. Taipei: Alumni Association of Taihoku Second Junior High School.]
- 台湾総督府文教局, 1940, 『臺灣の學校教育』, 台北: 台湾総督府文教局。[Bureau of Culture and Education in Government-General of Taiwan. (1940). *School Education of Taiwan*. Taipei: Bureau of Culture and Education in Government-General of Taiwan.]
- 津田勤子, 2018a, 「田中一郎氏インタビュー記録」, 未出版。[Tsuda, Isoko. (2018a). Interview of Mr. Ichiro Tanaka. Unpublished.]
- 津田勤子, 2018b, 「徳丸薩郎氏インタビュー記録」, 未出版。[Tsuda, Isoko. (2018b). Interview of Mr. Satsuro Tokumaru. Unpublished.]
- 徳丸薩郎編, 2002, 『がじゅまるの追憶』, 水戸: 台北市建成小学校同窓会。[Tokumaru, Satsuro (Ed.). (2002). *Memories of Banyan*. Mito: Taihoku City Ken-sei Elementary School Alumni Association.]
- 西川満編, 1943, 『臺灣繪本』, 台北: 東亜旅行社台北支社。[Nishikawa, Mitsuru. (Ed.). (1943). *Picture Book of Taiwan*. Taipei: Toa Travel Agency Taipei Branch Office.]
- 原佑介, 2013, 「「引揚者」文学から世界植民者文学へ——小林勝、アルベール・カミュ、植民地喪失——」, 『立命館言語文化研究』, 第24巻4号, 137-157頁。[Hara, Yusuke. (2013). Comparative Study of the Ex-colonizers Literature: Kobayashi Masaru and Albert Camus. *Ritsumeikan Studies in Language and Culture*, 24(4), 137-157.]
- 福嶋司, 1987, 「故 薄井宏先生を偲ぶ」, 『植物地理・分類研究』, 第35巻第1号, 57頁。[Fukushima, Tsukasa. (1987). Obituary of Dr. Hiroshi Usui. *The Journal of Phytogeography and Taxonomy*, 35(1), 57.]
- 鳳気至純平, 2012, 「書いたのは誰の歴史か? ——『南方移民村』から見る濱田隼雄の歴史意識——」, 『日本台湾学会報』, 第14号, 89-107頁。[Fugeshi, Junpei. (2012). Whose History Did He Write? A Study of Hamada Hayao's Historical Consciousness from *The Immigrant Village in the South*. *Nihon Taiwan Gakkaihou*, 14, 89-107.]
- 朴裕河, 2013, 「「引揚げ文学」に耳を傾ける」, 『立命館言語文化研究』, 第24巻第4号, 115-136頁。[Park, Yuka. (2013). Evacuation from the Former Colonies in Postwar Japanese Literature. *Ritsumeikan Studies in Language and Culture*, 24(4), 115-136.]
- 楊基銓, 1999, 『台湾に生を享けて』, 東京: 日本評論社。[Yo, Kisen. (1999). *Born in Taiwan*. Tokyo: Nippon Hyoron Sha.]

蘭信三編著，2013，『帝国以後の人の移動：ポストコロニアリズムとグローバリズムの交差点』，東京：勉誠出版。[Ran, Shinzo (Ed.). (2013). *Movement of People after the Empire: The Intersection of Postcolonialism and Globalism*. Tokyo: Bensei Publishing.]

二、中国語文献

林初梅，2017，「灣生日本人同窓會及其台灣母校：日本引揚者故鄉意識與台灣人鄉土意識所交織的學校記憶」，所澤潤、林初梅主編，『戰後台灣的日本記憶』，台北：允晨文化，307-359 頁。[Lin, Chu-mei. (2017). Wan-sheng Japanese Alumni Association and Their Alma Mater: School Memories Intersected with Japanese Repatriates' Nostalgia and Taiwanese Local Consciousness. In Jun Shozawa & Chu-mei Lin (Eds.), *Postwar Taiwan's Memory of Japan* (pp. 307-359). Taipei: Asian Culture.]

邱函妮，2004，『灣生、風土、立石鐵臣』，台北：雄獅圖書。[Qiu, Han-ni. (2004). *Wan-sheng, Climate, Tateishi Tetsuomi*. Taipei: Lion Art Books.]

張茂森，2019，『採訪者之眼：目擊台日近代關係史』，台北：前衛。[Zhang, Mao-sen. (2019). *Interviewer's Eyes: Observing History of Modern Relations between Taiwan and Japan*. Taipei: Avanguard.]

陳正哲，2011，「鐵道設站與住宅區開發——台灣建設史之規劃思想研究」，『環境與藝術學刊』，第 10 期，91-106 頁。[Chen, Zheng-zhe. (2011). The Construction of Railway Station and Development in Residential Areas—A Study on the Planning Concept of Construction History in Taiwan. *Journal of Environment & Art*, 10, 91-106.]

華樂瑞，2018，『當帝國回到家：戰後日本的遣返與重整』，新北：遠足文化。[Watt, Lori. (2018). *When Empire Comes Home: Repatriation and Reintegration in Postwar Japan*. New Taipei: Walkers Cultural Enterprise.]

黃錦珠，2014，「台灣記憶：個人與國族的對映和交疊 讀鈴木怜子『南風如歌——一位日本阿嬤的台灣鄉愁』」，『文訊』，第 349 期，112-113 頁。[Huang, Jin-chu. (2014). Taiwan Memory: Individual V.S. Nation: Reading *Taiwan As a Motherland: Gifts for Daughters* by Reiko Suzuki. *Wenhsun*, 349, 112-113.]

黃馨瑩編，2012，『成功九十濟濟國土：台北市成功高級中學九十週年校慶特刊』，台北：台北市立成功高級中學。[Huang, Xin-ying. (Ed.). (2012). *Cheng-gong 90th; Ji-ji Guo-tu: Special Edition of the 90th Anniversary of Chenggong High School*. Taipei: Taipei Municipal Chenggong High School.]

- 歐素瑛, 2003, 「戦後初期在台日人之遣返」, 『國史館學術集刊』, 第3期, 201-227頁。
[Ou, Su-ying. (2003). The Sending Back of Japanese People from Taiwan in the Early Postwar Years. *Bulletin of Academia Historica*, 3, 201-227.]
- 蔡知臻, 2017, 「跨國移動與書寫：以鈴木怜子の灣生身分及其回憶錄為例」, 蔡玫姿主編, 『跨國。1930。女性』, 台南：國立成功大學性別與婦女研究中心, 109-130頁。[Cai, Zhi-zhen. (2017). Transnational Movement and Writing: A Case Study of Reiko Suzuki's Wan-sheng Identity and Memoirs. In Mei-zi Cai (Ed.), *Transnation; 1930; Women* (pp.109-130). Tainan: National Cheng Kung University Center for Gender & Women's Studies.]

Taipei Images to Students of Taihoku Higher School: A Case Study of *Picture Book: Songs of Taihoku*

Tsuda, Isoko

**Contract Assistant Professor, Department of Applied Japanese,
Chihlee University of Technology**

Abstract

This study is one of the researches concerning students literary works of Taihoku Higher School (a higher educational institution existing in Taiwan for 24 years during the Japanese colonial period), and discusses how Japanese alumni built images for Taipei and why they had such memories for the city. The study chiefly analyzes the 27-page booklet of *Picture Book: Songs of Taihoku*, a collection of 21 works of poems, articles and prints edited and published by Ichiro Tanaka, a Japanese alumnus of the school, after he returned to Japan after World War II. During his 12-year (1934-1946) residence in Taipei, he had studied at Kabayama Normal Elementary School and Taihoku Prefectural Second Middle School and graduated from Taihoku Higher School in 1943. This study classifies Taipei images in each work into four types: (1) pastoral, (2) metropolitan, (3) vital, and (4) Taiwanese, with characteristics of each type illustrated respectively. Secondly, this study probes into how these Taipei images were formed based on the school life of Tanaka and his social contact with cultural workers. Lastly, the study tries to answer why these literary works are filled with nostalgia by focusing on Tanaka's postwar living environment (including his experience of being repatriated to Japan and his contacts with former classmates), in order to explore how Japanese who used to live in Taipei remember the city and what meanings this memory has brought to them.

Keywords: memories, image of Taipei, Ichiro Tanaka, Taihoku Higher School, nostalgia